

南下してへるロシアから国を守るため、幕末に何度も蝦夷地に渡った男がいる。希代の旅行家、松浦武四郎だ。志士として国防への堅牢な信念を持つ一方で、松前藩による庄政で疲弊するアイヌ社会に心を痛め、憤る。明治新政府では蝦夷地政策にかかわるが、やがて失望。「ばかくさい」の言葉とともに栄職を投げ捨て、やはり不遇だった菅原道真の天神信仰に心を寄せた。



「馬角斎」の失意と憤り

武四郎は1818年、現在の三重県松阪市に生まれた。今も残る生家の目の前は旧伊勢街道だ。13歳のときに沸き起こった伊勢神宮参詣ブーム「おかげ参り」の際は、松浦家の前を旅人がひっきりなしに行き交った。

「幼いころから武四郎は旅行ガイド本といふべき『名所図会』に夢中でした。おかげ参りのときなどは旅人から直接、地方の話聞くこともあったでしょう」

生家に近い松浦武四郎記念館の山本館長は、そう話す。

まだ見ぬ土地にあこがれた少年は、16歳で家出。約10年の間に本州、四国、九州を放浪した。身長148センチ、日に80キロ歩く健脚は「鉄の足」と呼ばれた。

転機は26歳のときだ。旅先でロシアの脅威が北方に迫っていることを知った。以後、28歳から41歳まで6度にもわたって蝦夷地を探

政府にキレた 栄職も捨てた

査し、膨大な記録を残した。

探査で見 てきたのは、北の大地を統治していた松前藩と悪徳商人によるアイヌへの搾取だった。過酷な労働を強いたり、女性を妾にしたりしている現状を目の当たりにした。武四郎は、こうした実態を出版物にまとめて批判したが、そのことで命を狙われ、蝦夷地探査を妨害された。

「武四郎は探査でアイヌの人々と寝食を共にしました。そのとき、ロシアの支配を受けたほうがマシという声を聴いて、心が日本から離れてしまっていることを憂慮しました。アイヌの協力なくしては蝦夷地は守れない。そのためにも彼らの命と文化を守らねば、と考 たと思います」と山本館長は推測する。



「北海道」の名付け親 松浦 武四郎



毎年2月に松阪市で行われる「武四郎まつり」のマスコットだげちゃん



▲自らが彫った「馬角斎」の印影 (いずれも松浦武四郎記念館提供)

3年、すでに3度の探査を行って蝦夷地通として志士たちに知られていた武四郎は、長州の吉田松陰の訪問を受け、海防問題を大いに語り合った。

両者の共通点は、早くから海外への関心が高かったことだ。武四郎は16歳で家出をしたとき、一唐天竺を目指す」と記した。そんな武四郎の玄孫で、世界で活躍するピアニスト、関孝弘さん



「もしヨーロッパに生まれていれば、『東方見聞録』を書いたマルコ・ポーロのようになつていたかもしれないね。権力に抗して自 の好きなことを貫くのが武四郎で、そこには信念や哲学があったと思います」。生まれた時代が鎖国下でなければ、軽やかに国境を越 たに違いない。

武四郎と松陰、共通点がもう一つある。彼らの評伝を最初に書いたのは日本人でなかったことだ。松陰の評伝は、『宝島』を書いた

英国人作家ステイブンソン。武四郎の方は、米国の人類学者スタールが大正期に著した。その生き方や信条、業績が、欧米人の心をいち早く捉 たのだろう。

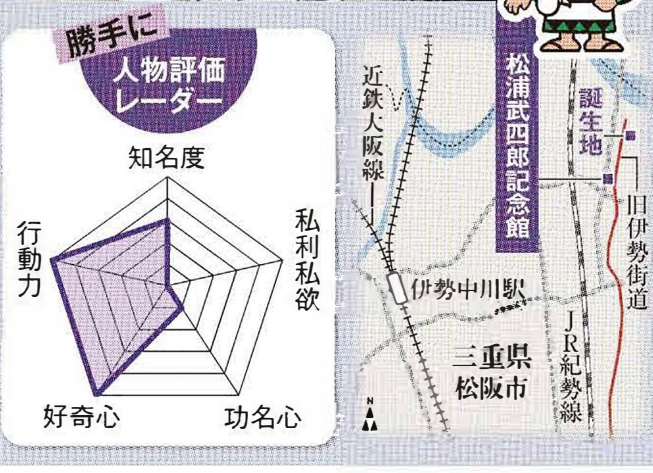
明治2年、大久保利通の強い推挙で、武四郎は新政府の蝦夷地政策のナンバー3に就いた。

「蝦夷地」に代わる地名を問われた彼は6案を提出。その一つが「北加伊道」だ。「加伊」はアイヌの人々がお互いを呼び合う「カイノ」に由来する。これを基に「北海道」に改称されたことで、彼はその名付け親になった。

だが、新政府は希望を託せる相手ではなかった。開拓長官の東久世通禧らが悪徳商人から賄賂をもらい、アイヌへの収奪は依然改まることはなかった。

「ばかくさい」 武四郎はわずか半年余りで栄職を辞した。以後一度も北海道を訪れていない。行かなかったのではなく、行けなかったのだろう。山本館長は「アイヌの人に申し訳な

す。私も以前、氏子の役員の方と一緒に、双六に登場する香川の滝宮天満宮を訪ねました」と語る。



観光たばこに登場



観光たばこに登場した(左から)間宮林蔵、松浦武四郎、伊能忠敬

昭和49年、北海道で武四郎と伊能忠敬、間宮林蔵という北方探査で歴史に名を残す3人がセットになった「観光たばこ」が発売された。

たばこと塩の博物館(東京)の学芸員、青木然さんは「偉人を題材にした観光

たばこは珍しいです。しかも通常、名所や祭りなど同じ題材で少しずつデザインを変 ながら毎年販売しますが、このセットは1年限りでした。屯田兵制度から100年という年でしたが、発売理由など詳しいことは「ありません」と話す。

「気持ちだったのでは」と話す。新政府のばかくさい、官仕のばかくさいを揶揄して彼は「馬角斎」と号し、明治の世を生きた。

官界を退いたのち、のめりこんだものの一つが天神信仰だ。明治6年に一人娘を10歳で亡くした悲しみからか、彼は再び旅に出るようになる。

学問の神様、菅原道真にゆかりの深い25の天満宮を自ら選定し、聖跡であることを示す銅鏡と石標を奉納する旅に出た。25の数字は道真の生誕日と命日にちなむ。

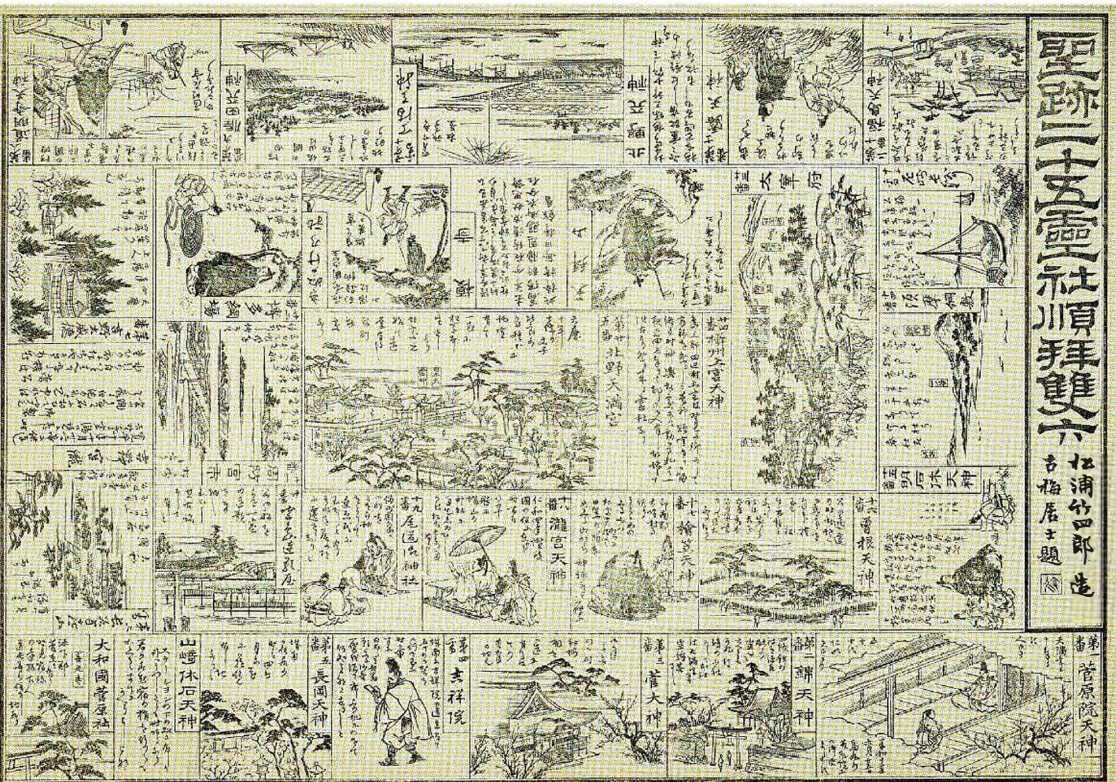
「志半ばで官職を辞した自身と、無実の罪で左遷されて失意のうちに亡くなった道真を重ねたのでしよう」。山本館長はそう析する。数年がかりで奉納を終ると、19年、仕上げに「聖跡二十五霊社順拝双六」を出版した。

21年2月、死は突然訪れた。前年に70歳で富士山に登頂するなど衰 知らずだったが、友人で儒者の鷲津殺堂宅で倒れ、数日後に息を引き取った。鷲津の孫が永井荷風で、その著作「下谷叢話」に武四郎も登場している。

東京・染井霊園にある墓には「教光院釈迦照北海居士」という法名が刻まれる。北海を遍く照らす人というなら「北加伊居士」がふさわしいように思 える。

次回12月17日掲載予定

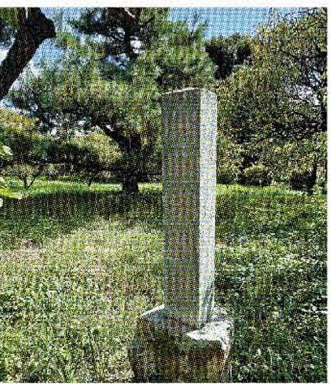
文・新村俊武



武四郎自らが選んだ25の天満宮をすいこめた「聖跡二十五霊社順拝双六」。道真の生誕地とされる京都・菅原院天神から始まり、福岡・大宰府への配流を経て、霊となつて京都・北野天満宮に還つてくるという構成で、道真の生涯をたどるものだ。

松浦武四郎記念館で学んでいる出口孝次さんの調査によると、武四郎奉納の銅鏡と石標は、戦災や

- ①菅原院天満宮神社(京都市)
- ②錦天満宮(京都市)
- ③菅大臣神社(京都市)
- ④吉祥院天満宮(京都市)
- ⑤長岡天満宮(京都府長岡京市)
- ⑥興喜天満神社(奈良県桜井市)
- ⑦威徳天満宮(奈良県吉野町)
- ⑧道明寺天満宮(大阪府藤井寺市)
- ⑨佐太天神宮(大阪府守口市)
- ⑩大阪天満宮(大阪市)
- ⑪露天神社(大阪市)
- ⑫福島天満宮(大阪市)
- ⑬長洲天満宮(兵庫県尼崎市)
- ⑭綱敷天満宮(神戸市)
- ⑮休天神社(兵庫県明石市)
- ⑯曾根天満宮(兵庫県高砂市)
- ⑰大塩天満宮(兵庫県姫路市)
- ⑱滝宮天満宮(香川県綾川町)
- ⑲御袖天満宮(広島県尾道市)
- ⑳厳島神社天神社(広島県廿日市市)
- ㉑防府天満宮(山口県防府市)
- ㉒綱敷天満宮(福岡市)
- ㉓太宰府天満宮(福岡県太宰府市)
- ㉔上宮天満宮(大阪府高槻市)
- ㉕北野天満宮(京都市)



曾根天満宮に残る銅鏡⑯と石標⑮。石標の奥にある松は菅原道真お手植え「霊松」の5代目

兵庫県高砂市